

め自立の道として助産婦の資格を取り、以後現在も医療に携わっておりますが、いまでも私は、故人になった主人が私達を守ってくれているのだと思ひ感謝いたしております。

化粧品と共に

兵庫県 三鼓 安治

学校を卒業して以来海外生活がつづき、支那語を武器として、終戦引揚げまで、化粧品原材料の輸入、販売業を営み、満州ではパイオニアとなるまで発展した。家族は妻と四女と五人家族、現在、子ども等は結婚して、平和な家庭をつくっている。

戦争が悪化し、戦時体制が強化され、物資が減少、統制強化で、企業者の合同、現地生産等、自給自足の開拓等で取扱商品も輸入もしだいに困難となって、現地生産に傾き、当方もコルク材を満州国内で自給するため、社員を派して調査を始めた。また、一方杏子種子を集荷

して搾油して、医薬品生産、化粧品生産、あるいは、齒磨生産をはじめ、東亜齒磨として、サンスター、ライオン齒磨に対抗すべく生産に乗出した。日本人社員は応召不在とあり、残る中国人社員と私一人。昭和二十年八月十四日、ついに私に召集がきた。妻より電話で午後二時までに静浦小学校に集合するように命令があったことを午前十一時に連絡があり、いそいで帰宅しました。中国人従業員に相談する時間もなく、中国人も驚いて、なにひと言も話せずに別れました。

また妻に対しても、これまた、話をする暇もなく、小さい子どもを四人を連れ、動転した気持ちであったと思います。

そのとき、長女十三歳、次女十一歳、三女四歳、四女生後四か月

同日夕方七時頃、妻は心配と不安で集合場所の静浦小学校へ子どもを連れて面会にきました。私も初めての応召で心も落ちつかず、話そうとせず、さびしく別れたのでした。妻が今後一人でどうなることか、とひじょうに不安といらだちの日が続くと思うと可哀そうに思いま

した。

翌日より毎日警備訓練で竹槍を持って突撃とか種々の訓練をすることになっていましたが、翌十五日昼頃、終戦の詔勅の重大放送をラジオで聞き、終戦となって直ちに帰れると思ったが、数日後除隊、帰宅することができてひと安心しました。

降伏が宣言された以上、われわれはどうなるものかわかりませんが、私は事実上の整理があり、中国人使用問題もあり、さっそく会社に出勤して善後策を講じました。

まず、銀行関係借入金処理とか、中国人従業員に対し、解雇手当を支払い、工場労働者に対してもいちおう社員と同様二か月半に相当する給料を支払って自由勤務にしたのです。実のところ、私自身も将来の方針が立たないのです。生活せねばなりませんので、取りあえず東亜齒磨を毎日製造しては販売していましたが、日本からの輸入がとまってたいへん売行き良好でした。

店は従業員が中国人が管理し、工場は一時閉鎖して、労務者が管理して時局の転換するのを待つばかりませ

ん。一般食糧の配給は止まり、大豆粕、落花生粕等が常食となり、なれない食事には苦痛を感じました。一方、衣類、家財の売り食いでもっと生活を続けていました。戦争に負けたわれわれは食糧を入手することもできずまったく困りました。

終戦直後、秩序がくずれ、方々で混乱が起き、騒動が発生して、略奪等がはじまり日本人の被害は大でした。われわれは、夜に入っても畳の上で女、子どもはモンペ、防空服装のまま休息するありさまです。安心して寝ることもできません。また、男は隣組で夜警団をつくって夜通し監視して、引揚げまで継続していましたので、中国人、およびソ連軍人の襲撃をまぬがれました。

私等、在留日本人失職者救済が目的で、有志の日本人が連名して保証人が保証するということで日本人会にまとまった金子を提出しましたが、日本に引揚げて帰ったらまったく無駄の金になったように思います。

一般秩序は、日本人警察官は姿を見せなくなり、中国人が代ってその任務を引きつぎしていましたが、日本人の被害者に対しては、なんら関係なしという不当な処置

ばかりでした。

引揚げ後、化粧品品の製造を始め、当時は現金売り、次ぎは手形取引となり、不渡が続出し、ゆきづまり、歯ブラシ販売に転業しました。がこれまた化粧品の場合と同様で、経験がないとできませんので、思いきって沖縄へ行きました。そして、今は海産物モックの輸入をしています。

現地除隊と引揚記

北海道 南 栄次郎

昭和十二年九月一日網走市にて目黒輜重兵第一連隊に召集されて、兵站自動車第十三中隊に入隊、十月十四日北支糖沾に上陸し境界線に沿って南下し黄河近くまで進み、十一月末に奉天經由大連より十二月一日上海に上陸して南京攻略及び第一次、二次除州戦に参加し、昭和十四年夏再び北支に戻り北支航空（現在北京飛行場）付き輸送隊となり、昭和十六年四月第三次帰還命令に依り約

三十人内地に帰還することになったが、私は当時独身三十二歳であったので、北京市にて現地除隊することを決意し、北支の鉄道である華北交通株式会社に入社、北京建設事務所勤務となり、現場に出張勤務中、十六年十二月大東亜戦争が始まり昭和十九年夏本社に転勤警務局勤務となり翌二十年八月十五日局長室にて終戦の詔勅を聞きました。

日華合弁であった会社が中国側に移譲されることとなり、翌二十一年一月まで中国側に事務引継ぎのため留用されて勤務しました。

平静であった北京市内も終戦とともに次第に治安が悪くなり、私宅も会社に出勤中には付近住民及び中国兵に依り家財道具、衣服等一切が皆無の状態になり、近所の邦人の方や会社同僚の方々の温情に依り衣類その他を頂き生活を続けておりましたが、十二月初に郊外の収容所に移り六畳間に二家族、その後八畳間に四家族の不自由な生活をしましたが、私共は妻と長女の三人家族で、妻は身重であったこともあって特別のほからいで三月末に引揚命令が出て郊外駅から天津収容所にと移動したので